

# 一、発 足

## 1 安 保 改 正

日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力および安全保障条約（日米安保条約）の改正案は、参議院の議決を待たずに昭和三十五年六月十九日、衆議院の議決の通り自然成立した。このいわゆる安保改正をめぐって展開された国会内外の政治的混乱とその收拾を、どう評価すべきかは、ここでの私の仕事ではない。この安保騒動と呼ばれる事件を、日本歴史の連鎖の中で、どのように位置づけるべきかという設問に應えるためには、今日といえどもなおその時期が十分熟しておると思われない。われわれは、今なお、この課題の解答を模索している最中だといってもあながち過言ではあるまい。ただ、ここでは次のことだけを指摘しておくに止めたい。

この騒動は、そのタイトルが示すような日米安保条約改正の是非をめぐる論議からいつの間

が大きく逸脱して、保守対革新、さらには治者对被治者の在り方を問う一大政治運動の性格に変わってきた。長期にわたる戦争と敗戦のもたらした物質的困窮からようやく立ち直ってきた日本国民は、自らの精神にある種の渴きと空虚さを覚えてきた。そして占領政治とその衣鉢を受け継いだ保守政治に、抵抗意識とも倦怠感とも判じ難い反発と不満を感じるようになってきた。この渴ききつた空気を、左翼勢力が黙って見逃すはずはなかった。たまたま岸政権が、安保条約の改正

それはたしかに安保体制下における日本の立場にある程度の自主性を盛り込み、国民の精神的空虚を少しでも埋めようと目論んだ善意のものであったのだが、を企図するに及んで、彼等は巧みに安保条約の改正をその改悪にすりかえ、さらには、これを国民の渴ききつた精神的渴望感に対する点火剤に転用して国民を安保体制打破へ、さらには保守政権の打倒へ駆り立てたのである。しかもそれは、中ソ両国の対日政策の執拗な展開と相呼応して大規模に展開された。安保騒動の舞台裏には、そういうカラクリが、半ば公然と仕組まれていたのである。ただ、なぜ多くの国民が、そのカラクリ性を意識しているものまでが動員されたかということ、さらには今日もなお同じ文脈に属する運動に動員されつつあるかという政治史的課題が、われわれの吟味すべき課題として残っておるのである。

## 2 公選へ

それはともかく、岸首相は、安保改正の批准終了を見届けて、六月下旬引退の意思を声明された。その引退声明があつた以上、当然のことながら、自民党としては後継首班の選考にとりかからなければならなかつた。自民党の規約によると総裁は当然その党大会において選任さるべきものであり、そのため、党は総裁公選規程をもつておるのである。ところが、当時の党内の空気は、総裁を選挙を通じて選ぶことは党内に拭いきれないシコリを残し、党の団結のためにとるべき道ではない。それはあくまでも話し合いの方式によって円満に選任すべきであるという意見が支配的であり、事実その方向に調整工作が進められた。しかし、この話し合い方式を強く主張した岸、佐藤主流派の考えの中には、安保改正の処理を中核として岸政治に批判的であつた河野派並びに三木派を、肅党の名の下に、次期政権から締め出し、岸、佐藤、池田、大野、石井のいわゆる五派による連合政権を打ち樹てようとする構想があつた。このことは、主流派による肅党工作が表面化し、河野派等からこの動きに対し強い反響が起つてきたことによつても明らかであつた。

話し合い工作の中心は、もとより川島（正次郎）幹事長で、その下に連絡役として、青木正、灘尾弘吉、鈴木善幸の三氏が選ばれ、益谷（秀次）副総理、佐藤（栄作）蔵相、松野（鶴平）参

議院議長、重宗（雄三）参議院議員総会会長等が幹事長の諮問に応ずるといふ体制が整えられた。青木氏等の三氏が連絡役に選ばれたのは、当初後継総裁に出馬の意向をもったものとして、大野伴睦、石井光次郎、池田勇人の三氏が噂されておったので、これに照応する措置であつたようだ。

### 3 話し合いの表裏

話し合い方式は、前述のように五派連合政権樹立という主流派の狙いによつて支えられたが、一方この方式を通して、或いは大野暫定政権を引き出し得るのではないかという大野派の思惑や、大野、池田間の対立の激化は、結果として石井政権の誕生を促すであろうという石井派の期待もあつて、大野、石井両派も熱心にこれを支持するようになった。さらには総理、総裁、副総理、副総裁の四つの主要ポストを、この三候補の間にそれぞれ配分することによつて、話し合いによる政権樹立を容易にしようとする党執行部中心の便宜論も取沙汰されてきた。しかし、この方式の成否の鍵は、何といつても党内で多数の勢力を擁する岸、佐藤主流派がだれを推すか、とりわけ岸首相自身の意志にかかつていたのであるが、岸氏を頂点とする主流派の去就は一向に決まらないまま、政局は十日間ほど低迷を続けた。

そこで川島幹事長は、七月二日に至って、臨時党大会を七月十三日に召集する手筈を決めた。これは話し合い工作に終着点を設けると同時に、話し合いがまとまらない場合に備えて公選への道を開いたものであった。一方、三候補とも、なかなかの強気で、容易に候補の座から下りる気配を示さなかった。池田派の中には、話し合いの不調を見越しての公選論が高まってきた反面、大野、石井両派は、池田派の公選論を力の優位を意識した高姿勢であるとして反発し、両派は「協力体制」から急速に「連合体制」に移っていった。かくて党内は、「親池田」と「反池田」の両勢力による角逐の様相を濃くすることになった。

#### 4 三候補の主張

この總裁選考劇を、三者の主張する政策の面からみれば、三氏の主張とも、同じ党内のこととて、基本的な違いは見当らないが、それぞれの主張に若干のニュアンスの相違はあった。池田氏は、内外にわたる政権の信用回復と当面の危機の打開は自分の手による以外にないと公言し、安保騒動の後だっただけに、反対党に対する寛容と忍耐を提言することを忘れなかつたし、大野氏は庶民と共に生きぬく優れた調停者としての情愛の政治を主張し、石井氏は明るい納得のゆく政

治を強調した。また次の政権の課題といわれた日中関係の打開については、大野氏は国連による解決を主張するのに対し、石井氏は当面の課題にすべきでないとしてこれをしりぞけ、池田氏は自由圏からの信頼と共産圏からの畏敬をうける主体性の確立が前提だといった。さらに主流派から強く要請されていた治安対策については、三氏ともデモの弾圧に反対し、デモが行なわれないような政治の実行をもってこれに応え、肅党の断行については、これまた三氏とも、党規確立の必要は認めるが、特定人の肅正には賛成できないという反応ぶりであった。

国内の経済政策については、石井氏は低所得者対策、成長によるヒズミ是正、一千億減税、労資協議団の創設を、大野氏は大衆減税、地価の騰貴抑制、公共事業の拡充を、池田氏は所得倍増、一千億減税、公共投資の増大をそれぞれ強調した。

## 5 公 選

川島幹事長を中核とする話し合い工作は、主流派がいぜん一本化への希望を捨てなかったものの、肝心の岸首相が特定候補支持の表明を避けたので、一向に進捗を示さなかった。他方、この状態に業をにやした財界は、政治の信用のためにも早急な政局の收拾を要求した。ちょうどその

頃、一月二十五日のロック・アウトに始まった三池炭鉱の争議は、いよいよそのヤマ場を迎え、「三池沖の海戦」という三三七人の負傷者を出すような緊迫した事態にまで発展しておった。政局の收拾とその安定を希求する声は、独り財界のみの声ではなかった。

そのような情況の下で、八日行なわれた政府と党の首脳会談はいぜん結論を得ず、川島幹事長もいよいよ公選已むなしとの肚を固めた。また各候補者も話し合い工作に見切りをつけ、同日大野氏が、翌九日には池田氏と新たに松村氏が、十日にはさらに藤山氏が、それぞれ立候補の宣言を行ない、石井氏を含めての以上五氏による混戦の局面を迎えるに至った。それぞれの候補は、国会の周辺に事務所を設け、所属国会議員はおのの部署について、挨拶回り、肩たたき等に活発な動きを見せる一方、各都道府県支部から二人ずつ選ばれた代議員の獲得等に狂奔した。その間を縫って新聞記者等による取材活動は、昼夜の別なく展開され、事実と虚報は複雑に交錯して、神経戦はいよいよ激しくなってきた。しかし、各議員や代議員が誰を支持するかは、大部分は予め見当がついており、工作の対象になるものは比較的少数数であった。そしてその目標はどの陣営においても不思議と一致しておるようだった。いわばこの少数数のために天下が大騒ぎをしなければならぬことになるのであるが、「少数」をどう納得させるかということが、元来、民主主義の支払うべき代償であるのだから已むを得ないことではあった。

ところが十三日の早朝になって大野氏は突如立候補を辞退し、その日の党大会をボイコットして丸ノ内ホテルに開かれた大野、川島、石井、松村、河野、三木、石橋の七者会談では、松村氏もまた辞退して、石井氏を軸として党人派勢力を結集し、官僚主義的勢力に対抗するという敵前における戦術転換が打ち出されたのである。この動きを河野、三木両派の主導によるものとみてとった岸派は、決定的に池田氏支持に傾き、藤山氏を支持する者も決戦投票では池田氏支持に回ることに諒解がついた。そして翌十四日の党大会では次のような結果で池田新総裁が選出された。

	第一回(票)	決戦(票)
投票総数	五〇一	五〇一
有効投票	四九八	四九六
池田 勇人	二四六	三〇二
石井光次郎	一九六	一九四
藤山愛一郎	四九	一
松村 謙三	五	一
大野 伴睦	一	一
佐藤 栄作	一	一
無効	三	五

## 6 勝 因

かくして池田新総裁が誕生した。池田さんの立候補は、無理をしたり背伸びしたりした結果ではなかった。岸首相引退の後においては、池田さんは最も有力な後継候補として世上の注視を浴びていた。われわれ同志が、池田さんを推し立てたのは極めて自然の道行であった。しかし池田派に最初から勝算があったわけではない。いわば無我夢中で愚直に闘っただけである。もとよりその陣営のチーム・ワークがよくとれ、守備の手堅さを発揮することができた。しかし一面、池田氏の勝因の中には、主流派の協力と相手側の失策に帰すべき原因があげられるであろう。さらに石井氏を推した諸勢力の合従連衡が、官僚的勢力反対という消極面においては一致していながら、政局担当という積極面においては、太い帰一した構えがとられていなかった。たとえば外交政策からみても、親国府、規中共、中道的の三つの勢力が戦術的に合従してあるという印象を一般に与えたことは否めない。またいわゆる肅党のやり玉にあげられていた河野・三木兩派と石井支持派の連衡は、すでに主流派の大勢が池田支持に傾いてきていたのを、さらに決定的にするという結果を招いたことも否定できまい。それにしても十四日の党大会が、何らの混乱なく静粛に

かつ秩序正しく運営されて、新総裁が選ばれたことは、自民党のためにも日本の民主政治のためにも慶すべきことであつたと思う。

池田さんが再度岸内閣に入閣を需められたのは、ちょうどその前年の七月であつた。その時池田夫妻は、一年半前、岸内閣を同時に去つた三木武夫、灘尾弘吉の両氏に対する義理や、小金義照さんはじめ未だ台閣に列する機会に恵まれていない同志に対する配慮から、どうしても入閣に踏み切れないまま苦悶を続けられていた。しかし当時の政局は事実、池田さんの閣内協力を必要としていた。そのため岸内閣の認証式は、池田さんの諾否を待機していたのである。その時入閣懇請のため信濃町の池田邸を訪ねた田中角栄君は「政局の安危は貴方の閣内協力にかかつております。この際は貴方以外の方の入閣では駄目です。天下のため入閣に踏み切つて下さい。そうすれば次の政権は貴方のものです。躊躇なく御決心を願います。」と言いつつ、嫌がる池田夫人を促してモーニングの用意を勧めた。池田さんが通産大臣として岸内閣に入つて一力年、運命の星は、田中君の予言の通り、池田さんの上に輝いたのである。